

雪華慧太
Yukihana Keita

召喚軍師 デスゲームの

～異世界で、ヒロイン王女を無視して
女騎士にキスした俺は！～

3



テネブライ・ゼレスティス

千年前、神殺しを行った五人のハイエルフの一人。恐ろしい野望を秘め、敵国の皇帝の背後で暗躍する。

アイリーネ・フィーリア・ドラグリア

新生ドラグリア王国の女王。清楚で優しが容姿だが、芯の強さは父親譲り。

リーア・リグナ・アルドリア

アルドリア王国の第一王女。妖精のような美少女だが、小さい胸にコンプレックスを感じている。

ミルダ・リューゼリア

赤い髪の魔女として知られるハーフエルフ。アルドリア王国の宮廷魔道騎士団長を務めている。

ルピア・アルファイラ

アルドリア王国の聖騎士団長。大陸屈指の剣の腕と美貌から、アルドリアの薔薇と呼ばれている。

春宮龍音 /リュオン・マナエル

主人公ハルヒコの父親で、謎の凄腕剣士。異世界の秘密を握るキーパーソン。

ヨアン・アルリード

アンマル王国の王女。スピードを重視した刀での戦闘を得意としている。

春宮俊彦/ハルヒコ

本編の主人公で、天才的なゲームの腕の持ち主。異世界に召喚されて、滅亡寸前のアルドリア王国の軍師となる。

プロローグ

千年前——。

「これがヴェリタスか……。一体どのようにしてこんな物を作ったのだ。我らエルフとて、これほど物を作る技術はない」

思わずそう呻いたのは、まだ年若いエルフの騎士である。

天空に届くかのごとく聳え立つ白い塔は、圧倒的な威圧感をその場にいる者達に与えていた。傍にいるだけで、建物の質量に押し潰されそうになるほどだ。壁面は博識なエルフ達すらも目にしたことのない素材で出来ており、塔自体が一つの生物のように淡い光を発している。

「まるで鼓動しているみたいだな。古に滅んだ竜族の遺跡とは聞いているが、この建物 자체が生命を持ち、息をしていると言うべきか」

辺りに整然と列をなす千名近いエルフの騎士達を束ねる女が、重々しく感想を口にした。

エルフの王国であるリーシスの魔道騎士団長、エリス・マーティエルである。エルフ特有の黄金の髪が、塔から溢れる空気に靡いている。整った鼻梁に涼しげな瞳。その凜々しさに騎士達は思わず見惚れた。

エリスの瞳は塔の入口に当たる巨大な扉を見つめている。

副官であるミルト・シルトアが口を開いた。

「エリス団長、やはり我らも国王陛下と共に塔の中に入るべきだったのでは？」

国王陛下とはファシアス・ゼノン。偉大なるエルフの王と呼ばれる男である。

ミルトはそう進言したが、エリスは静かに首を横に振った。

「ファシアス様が我らにここで待つようにと命じたのだ。おそらくは、我らでは足手纏いにしかならぬのだろう」

ミルトはエリスの言葉に目を見開く。

「馬鹿な！ 栄光あるリーシスの騎士団長であられるエリス様でさえ、戦力にならないというのですか？ そんな、まさか……。一体このヴェリタスには何があるというのです!?」

美しい騎士団長はミルトの言葉を受け、塔を見上げた。

「分からぬ。だが陛下はあの男だけは連れて入られた。一体何者なの……。あのテネブラエという男」

「エリス様。私はあの男を信用できません。国王陛下のご様子が少しづつおかしくなつていったのは、三年前にあの男が現れてからです」

エリスは白く巨大な塔を見上げる。

「テネブラエ・ゼレスティス。奴は一体何処からやつて來たのだ。あれほどの力を持つ男が、突然現れるなどありえぬ。それに王妃陛下のあの白い翼だ、あれは一体……」

エリスは、背後に停まっている白く美しい馬車の方へ目をやつて言つた。

ミルトは頷く。

「奇跡の翼、民はエルティシア王妃陛下のあの白く美しい翼をそう呼んでいます。確かにあの翼の光が、死を待つのみの病人達を癒やすのをこの目で何度も見ました。ですが近くでお仕えしておりますと、あれはエルティシア様の命を奪うものに思えてなりませぬ」

「テネブラエは、あれをファシアス様が神となる前兆だと申しているが、私にはそうは思えぬ。あの翼が生えて以来、王妃陛下のお体は弱られる一方だ」

エリスはそう言うと、唇を噛み締めた。

「人間や獣人共の勢力は次第に増している。数で及ばぬ我らエルフは、いずれ辺境の地に追いやられよう。陛下は自らが神となれば、全てを解決できると信じておられる。何より王妃陛下の命を救えると……。その為に、この禁断の聖地と呼ばれたヴェリタスまで軍を進めて來たのだからな」

ミルトはエリスに尋ねた。

「エリス様、いくらファシアス様といえど、我らエルフが神になどなれるものなのでしょうか？」

「……」

エリスは、指先で腕の手首に結ばれた鮮やかな色の組紐をなぞる。

ミルトはそれを見て目を細めた。

「ミルファール様がお作りになられた守り紐ですな、我的手にもございます。ミルファール王女殿下はお優しい。兵士一人一人に自ら編まれたこの紐を授けて無事を祈り、笑顔で見送つてくださつた。あの方は、我らを照らす光のごときお方です」

「幼い頃から不思議と私に懐いてくれた。エリス、エリスと私の名を呼んで。今ではすっかり大人になつてしまわれたが、私にとつてはいつまでも幼き頃のあの方のままだ。全てが杞憂であればよいのだが……。神になどなられず、たとえ僻地に追いやられたとしても、ファシアス様とエルティシア様のもとで微笑むミルファール様が見られれば私はよいのだ」

ミルトはエリスの言葉に深く頷く。

「この地に何があるにせよ、皆無事で帰りたいですな。ミルファール様の笑顔が早く見たいもの

です」

エリスは瞳を閉じると楽しげに微笑んだ。

「ああ……。あの方の無邪気な笑顔を見ていると、戦いに満ちたこの世界の現実も忘れられる。そして、こんな不条理な世界を作った神のことさえ、許せるような気がする」

エリスの手はしつかりと守り紐を握り締める。

その時、騎士団の数名の兵士達が声を上げた。

「な！ 何だあれは!!」

「空を見ろ！」

その声に促されて、エリスとミルトも天を仰いだ。

塔の上部から、黒い雲に似たものが地上に向かつて来る。

（あれは、もしや！）

恐ろしい魔獣の叫び声が大気を振動させた。

エリスの耳には巨大な何かが羽ばたきながら、こちらにやつて来る音が聞こえた。徐々にその形がはつきり目視できるようになる。

塔の上部から、黒い雲に似たものが地上に向かつて来る。

（あれは、もしや！）

ミルトは剣を構えて低く唸つた。

「ワイバーンだと!? しかもこの数は一体！ 信じられん、数百はいるぞ!!」

太古に滅んだと言われる高位の竜族とは違い、未だに生き残っている知性を持たない小型の飛竜。それがワイバーンである。

数頭の群れなら深い渓谷などに棲息しているが、これだけの大群は通常ならばありえない。不気味な鳴き声を上げながら、モスグリーンの巨体が次々とエルフ達の方に向かつて降りて来る。体表を覆う鱗が、太陽の光を浴びて鈍く輝いていた。

素早くエリスは呪文の詠唱を始める。

「我命ず、疾風の化身にて大いなる大気の精靈よ。集いて我に仇なす敵を切り裂け！ グラディアス・アーエル!!」

魔力によつて輝きを放つエリスの体から、鋭い風の刃がワイバーンの群れに向かつて放たれた。攻撃を開始したのは彼女だけではない。天空から襲い掛かる飛竜の群れに、騎士団の兵士達が一斉に魔法を打ち出していく。

大地は、切り裂かれたワイバーン達の血で見る見る赤く染まつた。生臭い体液の臭いが、血に飢えた魔獣達の一団をさらに凶暴化させる。

地表へ落下した仲間を、感情のない黒いガラス玉みたいな瞳で追いながら、ワイバーン達は下降を続けていく。

——次の瞬間。

「〔〔ぐあああああ!!〕〕」
「〔〔ぐあああああ!!〕〕」

ワイバーンが恐るべき速さで飛来し、瞬く間に上空へ舞い戻つたのだ。その頸には、無残な仲間の騎士の体が咥えられている。

周囲に血しぶきが飛び散つた。

「いかん!!」

ミルトは前方の数名の兵士達がかき消されるように、その場から忽然と姿を消すのを目撃した。

「〔〔ぐあああああ!!〕〕」
「〔〔ぐあああああ!!〕〕」

ワイバーンが恐るべき速さで飛来し、瞬く間に上空へ舞い戻つたのだ。その頸には、無残な仲間の騎士の体が咥えられている。

周囲に血しぶきが飛び散つた。

「いかん!!」

ミルトは自らも魔法を放つ。だが、騎士団の魔術の弾幕が手薄な場所から、ワイバーンの群れが雪崩を打つて地上に降り立つと、エルフの騎士達にその爪を振るつた。

さらにエルフの柔らかい体に、ワイバーンの鋭い牙が容赦なく食い込む。

これに对抗するエルフ達の強力な魔法の一撃が、ワイバーン達を一体、また一体と物言わぬ肉塊へと変えていった。

——引き裂き、喰らい、屠られる。

その光景は、悪魔的才能を持つ画家が描いた地獄絵図のようだ。双方の断末魔が、空と大地に響いている。

「ひるむな！ 打ち続ける!!」

ミルトは叫んだ。

「ひるむな！ 打ち続ける!!」

(いかん、とても持たぬ!!)

エリスは危機を察した。このままでは直に騎士団は壊滅するだろう。

「ミルト、少しだけ持ちこたえよ」

エリスの低い声に、ミルトは魔道騎士団長の悲壮な覚悟を読み取った。

「エリス様、何をなさるおつもりです!?」

凛々しきエルフの体に膨大な魔力が集まつていく。全身を破裂せんばかりの凄まじいエネルギーだ。エリスは恐るべき精神力で、今にも暴走を始めようと魔力を抑え込みながら、それを体内に蓄積し、徐々に圧縮させていく。

「それは、自爆魔法！ やめてください団長!!」

己の命を引き換へにした途轍もない魔力の解放――。

そんな禁術を使えばどうなるか。その結果を最も理解しているのは術者だろう。限界を遥かに超えた術者の肉体は、熟した果実が弾けるように四散するのを避けられない。

エリスは天高く自らの剣を振り上げた。

あらゆるものを破壊する冒涜的な力が、その剣先に凝縮されていくのがミルトには分かつた。副官がこよなく敬愛する団長は、己の命を犠牲にしてこの窮地を脱するつもりなのだ。

「さらばだ、ミルト！」

手にした剣が碎け散り、命を懸けた極限の魔撃が放たれる瞬間。

白い馬車の中から女の声がした。澄み切った水晶を思わせる透明感のある美しい声だ。

「おやめなさい、エリス」

馬車の扉が開いて人影が現れる。煌くブロンドの髪と黄金の瞳。

天上の美的女神すらも、この女の姿を目にしたならば、嫉妬のあまり正気を失うかもしれない。

エルティシア・リューゼリア。

エルフの王、ファシアス・ゼノンの妻である。

知能が低いはずのワイバーン達が皆、水を打つたように静まり返つてエルティシアを凝視している。というより、彼女の背中に生えた白く輝く翼の神々しさに釘付けになつていてと言つべきか。

さらにその翼が、花びらみたいに白い羽を空に舞わせていた。

エリスは、エルティシアの体と翼から溢れる魔力を感じて叫んだ。

「いけません、王妃陛下！ それ以上その力を使つてはならぬとファシアス様が！」

エリスの言葉通り、王妃の美貌は青ざめている。死に繋がる病を背負つてゐる訳だろう。

「良いのです、エリス。忠義を誓う貴方達を見捨ててまで、生きるなど愚かなことです。それに貴方が死ねば、あの子が悲しむでしょう。もし私に何かあつた時はエリス、ミルファールを頼みましたよ」

「エルティシア様……」

王妃のその言葉に、エリスの目には涙が浮かんだ。
エルティシアの唇が開いて、辺りに歌が響き渡る。

とても美しい歌声が――。

その場にいるエルフとワイバーン、全ての生き物達が、ただその歌に魅了され心を奪わっていく。
やがて白い光が、エルティシアを中心にドームを描きながら輝きを増し広がつていった。

エルフ達は口々に叫ぶ。

「こ、これは」

「信じられん、傷が塞がつていく！」

驚くべきことに、その光がエルフの騎士達の傷を癒すと同時に、ワイバーン達の黒いガラス玉に似た目に、微かな知性を宿させていくではないか。

「『ギギヤ』」

ワイバーン達は、いつしか命令を待つ忠実な僕のようにエルティシアを見つめながら、彼女の周囲に集まつて来た。白い翼を持つエルフを女王と崇めているらしい。

エルティシアは彼らに対して静かに命じた。

「お行きなさい。お前達の帰るべき場所へ」

人の言葉を解さぬ凶悪な獣として、ただ無秩序に暴れるだけだったワイバーン達が、一斉に翼を広げた。

「『ギギイ、クケーン！』」

ワイバーン達は一声大きく鳴くと、大空に羽ばたいた。その翼が作り出す風が、エリスの頬を撫なでる。次第に、ワイバーン達は雲の中に消えていった。

それを眺めながらエルティシアはその場に崩れ落ちる。

「うう……」

エリスはすぐに駆け寄つて、その体を抱き上げる。氣を失つている王妃を抱いてエリスは叫んだ。
「ミレティス！ 何をしている、王妃陛下が!!」

エリスの声に応じて、馬車の中から一人のエルフが姿を現した。エルティシアには及ばないものの、美しい神官姿の女である。

その顔は苦悩と苛立ちに満ちていた。

「分かっているでしよう……。もう無理よ、エリス。私だってやれることはやつたわ。治療は続けできただけれど、これ以上は私の力ではどうすることも出来ない」

ミレティス・ディアトリス。

エリスの幼き頃からの友で、共に魔術を学んだ仲間。リーシスの神を祭る神殿の神官長である。

彼女は、ゆっくりとエリスに歩み寄りながら口を開く。

それから気が触れたように笑い出した。目の前の高貴な存在を救えない己自身を嘲っているのだ。『私には、数年前から何故か神々の声が聞こえなくなつたわ。王妃陛下の背中にこの白い翼が生えたのも丁度その頃。やはりテネブラ工様の言う通りなのよ。これはファシアス様が……いいえ、我らエルフ族の中から神が生まれる前兆。もしそうなら、私はきっとその一翼を担つてみせる。新たな神々の一人としてね』

エリスは、友のその言葉に怒りを露わにした。

「ミレティス、お前はあの男に何を吹きこまれたのだ！……知つてはいるのだぞ。神官でありながら、お前があの男と夜を共に過ごしていたことも」

ミレティスの目に殺気が宿る。

「何がいけないの！ 神はもう私に答えてはくれない！ このままではエルフは、鼠のよう増え続ける人間や獣人どもに征服される！ 数に圧倒されて魔力を使い切きり、捕らえられたエルフの女がどうなるか……。あんな悍ましい生き物達の玩具にされるぐらいなら、私は何だつてするわ！！」

長寿である代わりに、エルフが子供を授かる事は少ない。魔力が強大であつても、圧倒的に数が勝る人間や獣人族によつて、いまやエルフは存続が脅かされていた。

女のエルフは捕らえられれば、ハーフエルフを産む道員にされる。ミレティスやエリスのような美しく魔力の高いハイエルフがどんな運命を辿るのか。それはエリスにも分かっていた。

ミレティスの目に、狂気の色が宿る。

「見てエリス。王妃陛下のこの美しい翼、これが我らエルフが神となる前兆でなくて何だというの？……殺すのよ。神になつて、あの悍ましい連中を皆殺しにするの！！」

「ミレティス……。お前、それは何だ！」

エリスは、怯えながら自分自身を抱きすくめる友の背中に、黒く大きな翼が広がつていくのを見た。

王妃エルティシアとは対照的な、漆黒の禍々しい翼。

凄まじい魔力がそこから放たれている。ミレティスの瞳が赤く染まつていた。

「ふふ、殺すのよ、エリス。皆殺すの……」

「一体どうしたのだ？！ ミレティス！ お前！」

ミレティスの瞳が真紅に輝いていく。

『コロスノヨ……。ミンナ』

（ミレティス？ いや違う、何者だ!? こいつは！）

エリスは剣を構えた。

ワイバーンとの闘いで生き残ったエルフの騎士達も、ミレティスの変貌に気がついて動搖の声を上げる。

「何だあれは！」

「あれは！ ミレティス様か!?」

「あの黒い翼は一体何なのです、エリス様！」

ミルトはエリスを守るように前に進み出る。

「エリス様！ ミレティス様のあの姿は一体

「ミルト……。あれはミレティスではない！」

エリスは呻くように言うと、黒い翼を大きく広げていく女を睨んだ。

「何者だ、貴様！ ミレティスに何をした!!」

そう叫んだエリスの体に無数の黒い影が広がっていく。影がミレティスの背から伸びる黒い翼だとようやく気づいた時には、周囲は静寂に満ちていた。エリスの部下の騎士達は皆、その影に切り裂かれた。副官のミルトでさえ地に這いつくばり、光を失った目でエリスを見上げている。

流れ出す血が、ヴエリタスの白い敷石を染めていった。

（何だ……？ これは一体何なんだ……）

呆然と辺りを見渡すエリスの目に映ったのは、まさに地獄だった。

真紅の血溜まりの中に、エリスはただ一人立ちすくんでいた。エリスは、時が止まつたかと思つた。

音もなく黒い翼を羽ばたかせて、女がエリスの前に舞い降りる。

まるで神さえも恐れぬ悪魔のように。

その口が、赤い三日月状に開いた。笑つているのだ。

漆黒の翼がエリスを抱きかかえ、ゆっくりと覆っていく。それはエルフの女騎士の体にじわじわと食い込んでいった。

「お前は、一体何者だ……。こ、このヴエリタスとは一体何なのです」

その生き物は、不気味な笑みを浮かべながら意識を失いかけているエリスを眺めていた。

そして赤い口から言葉が発せられる。

『知りたいかエルフよ。神を殺すための遺跡、それがヴエリタスだ』

エリスの目が最後に見つめていたのは、自分を包み込んでいく漆黒の闇だった。

第一話 封印された記憶

ドルメールが率いる黒帝師団が帝都を出た後——。

帝都パレスティアの地下神殿の前には、かつてのハイエルフにして上級精霊のテネブラエと、エルフの神官長ミレティスが立っていた。

「知りたいかエルフよ。神を殺すための遺跡、それがヴエリタスだ」

ミレティスは目の前にいる男が発したのと同じ言葉を、千年前に自分がエルフの騎士団長エリスの前で口にしたことをはつきりと思い出した。

ミレティスの脳裏に、恐ろしい記憶が蘇る。

真実の塔ヴエリタスでの千年前の記憶。

あたかもそれが、ミレティスの記憶の封印を解くカギだつたかのように。

同時に目の前に立つテネブラエの胸に広がつていく黒い痣が、竜の嚙に似た形を帶びていった。

「くくく、思い出したか、ミレティス。千年前、お前が何をしたのかを」

「そんな、嘘よ……。私が、エリスを！」

ミレティスは何度も嘔吐した。

友の体を、躊躇もなく切り裂いていく記憶と感触が全身に蘇つていく。

「違う！ あれは、ワイバーンの群れがやつたのよ……。私じゃない」

自ら発したその言葉が、虚ろな偽りであることを、もはやミレティスも分かつていた。

千年前、精霊王と目の前のこの男があの巨大な塔の扉から出てきた時、その地にいたエルフの騎士達は全て死んでいた。

強い力を持つハイエルフの騎士団長エリスまでも。

何も覚えておらず、突然と立ち尽くしていたミレティスの前には、王妃エルティシアが気を失つたまま横たわっていた。

美しい白い翼に、おびただしい数のエルフの死体、それと数十頭のワイバーンの死骸。

全てはワイバーンの仕業とされていたはずだった。

再び激しく嘔吐する。

「ええええ!! うあああああ！」

自らの背中に生えていた何かが、同胞達の肉体をすたずたにしていく生々しい感覚。

あるはずのない黒い翼、その悍ましい記憶が蘇り、美しいエルフの神官は惨めな四つん這いの体勢になつて吐き続ける。

その朦朧とした意識の中で、ミレティスはある結論に至った。

——この男はテネブラ工様ではない！

ミレティスがそう確信した瞬間——。

激しい怒りの炎がミレティスの瞳に灯り、強烈な稻光がその手から放たれた。

それがテネブラ工の体を焼き尽くしたかに見えた。ところが——。

「お前は、何者だ!? ……テネブラ工様をどうした！」

「お前の愛する男か？ そんな男は、どうにこの私の器としての役割しか果たしておらん。千年前からな」

かつて、この地に集つた五人のハイエルフ。千年前、この扉を開き神と呼ばれるほどの力を得た上級精靈。彼らに匹敵する力を持つ、エルフの神官長ミレティスの目が鋭く光つた。

恐ろしいほどの魔力が、妖艶な女エルフの体から溢れている。

「ほう、精靈王にこの地を任されるだけはある。神になる野望を抱くのに相応しい女だ」

男はミレティスの魔法攻撃も全く物ともせず、静かに笑つた。

「馬鹿な！ そんな、このわたくしの雷光を！ おのれ!!」

「くく、つれない女だ。あれほど愛し合い、この腕の中で泣きながら何度も私に忠誠を誓つたではないか」

その言葉に、ミレティスの全身から殺気が迸つた。人の領域を遥かに超えた凄絶な美貌と魔力である。

「我命ず、全てを焼き尽くす稻妻よ、集いて我に仇なすものを滅せよ！ エル・ヴォルテリア!!」無数に生じた稻光が一斉に男の体に襲いかかる。神の手による断罪とも言うべき光景だつた。強烈な破壊音が辺りに鳴り響く。

「滅しなさい！」

だが次の瞬間、神々しいエルフの美貌が歪んだ。

ミレティスの手から放たれた雷光が、逆流するように黒く染まつていく。

「そ、そんな！ 何!? これは!!」

ミレティスは呻いた。その体からドス黒い炎が滲み出している。

男は平然とミレティスを眺めていた。

美しいエルフの神官長が激しく身を振る。

「一体これは！ くつ！ うああああ!!」

それは極めて残酷で煽情的な光景だつた。

自らの魔力を黒く侵食されたミレティスは、全身を仰け反らして痙攣する。テネブラ工が放つ黒い炎が、ミレティスにまとわりつき、目、鼻、口……と、その体の至る所から侵入し、彼女の内部

を躊躇しているのだった。

「うぐっ！ はうううう！！

整った鼻梁が激しく震え、男達を魅了するその瞳が大きく見開かれる。腰から伸びる艶めかしい

白い脚が、ローブから乱れ出て露わになつた。

煌くようなブロンドの髪が漆黒に染まる、ミレティスはその場に倒れてビクンと体を震わせた。

テネブラエは邪悪な笑みを浮かべながら、女の傍に歩み寄る。

女の豊満な胸に、テネブラエと同じ染みが広がつてていく。精神を侵食するかのごとく、それが黒い龍の牙を作つた。

ミレティスは美しい唇を震わせて、何度も嘔吐する。

「どうだ、精神の奥まで深く入り込まれる気分は？ 千年前、一度は経験したはずだ。すぐに思い出させてやろう」

「やめろ……。それ以上は……。あああっ！」

テネブラエは、ミレティスの顔を自分の方へ向けさせて低く笑つた。

「どうしたエルフよ。知りたいのではなかつたのか？ この『門』と呼ばれる遺跡、そしてヴェリタスの秘密を」

「く……うう」

エルフの神官長の手に再び雷光が宿つた。だが、それはすぐに黒い炎に呑み込まれてしまう。

ミレティスの瞳に絶望の色が浮かんだ。

「お前達は知らぬ。その魔法という力を、そもそも誰が与えたのかもな。エルフ、獣人、そして人間でさえ、ある一つの目的の為に作られた存在に過ぎぬのだ」

テネブラエのその言葉に、ミレティスは目を瞠る。

「作られた？ 何を言つている……」

「すぐに分かる。お前が主である精靈王を裏切つてまで、その座を望んだ神という存在、それが一體、何であるのかもな」

テネブラエの形をしたその男の口から呪文の詠唱が紡がれていく。

ミレティスすら知らぬ、難解で複雑怪奇な術式が完成し、周囲一帯の空気をびりびりと鳴動させた。それに呼応して、『門』と呼ばれる巨大な遺跡の扉が淡い光を放つていく。

やがて、その表面には美しい壁画が描き出されていった。

「こ、これは！」

ミレティスの唇が震えている。

やがて、その中に隠されたものの正体がつまびらかにされるに従い、それをしてエルフの神官長の唇が驚きに戦慄いた。

「まさか、あれは……。一体、お前は何者なの！」

男は低く笑った。

「我が名はアデイス・フォーエン。エルフよ、いずれ時は満ちる。ただし、千年前とは違う形でな。その時、お前達は全ての真実を知ることになるだろう」



帝都を一望する小高い丘の上に、ルドアはいた。

白狼族特有の白くて大きな耳が、帝都から進撃する大軍勢の情報をつぶさに聞き取っている。その数はおよそ三万。皇帝ドルメール直属の軍団で、帝国最強と聞こえが高い黒帝師団である。バルヒコ達がガデルを制圧した夜、獣人族の赤き獅子王バルダス・デュカオーンの命で斥候に出た小隊の一つは帝都付近に潜んでいた。

通常の行軍ならガデルからパレスティアまでは急いで二日、長ければ三日はかかる。だが白狼族の精銳部隊は昨晩から今日の昼過ぎまで駆け続け、この地に達していた。移動能力の高さは、斥候としての優秀さを示している。ルドアはその小隊の隊長であった。

ほかの小隊は、ガデルを出て帝都の北に向かった帝国の天才軍師アルマン・エッテハイマン公

爵を追っているはずだ。

「ルドア様、今何か地鳴りのようなものが……。ドルメールの軍勢によるものではありません」

ルドアは部下の言葉に頷いた。

「確かに俺にも聞こえた。帝都パレスティアの地下から響いてきたみたいだったが」

「いかがいたしましょうか」

ルドアは答える。

「まずは、バルダス様の傍におられるエハル様に、ドルメールが率いる黒帝師団の動きを伝えねばならん」

そう言うとルドアは天を見上げ、高く遠吠えをした。

それは白狼族以外には聞き取れぬ音域で大気を振るわせていく。

するとその声に反応して、数キロメートル先でも同じ遠吠えが始まった。

白狼族特有の情報伝達法である。

ヴェリタスの近隣に潜むバルダス達のところまで情報を届けようというのだ。白狼族の斥候は、そこへ至るまでの様々な経路に点在し、情報の共有を行っているのである。

ルドアは数名の部下を静かに見つめた。

「我ら獣人族は、新生ドラグリア王国のアイリーネ女王陛下をはじめ、アルドリアの勇者殿に命を

賭してでも恩を返さねばならん。俺はこれから帝都パレスティアに潜入する。黒帝師団がおらぬとはいえ、数千の帝国兵は残つてゐるだろ。生きて帰れる保証はない」

共に来るか？

そう問い合わせるルドアの眼差しを見て、屈強な白狼族の兵士達は朗らかに笑つた。

「ルドア様、今さらどうしてこの命を惜しましようか」

「たゞ我らが死したとしても、必ずやあのお方達が我らの悲願を成し遂げてくださいます」

「その辺になれるのであれば、恐れるものなどございません」

ルドアの精悍な顔に笑みが浮かぶ。

「馬鹿な連中だ、お前達は。……よし、では行くぞ！」

ルドアはヴェリタスで待つエハルにそのことを伝えるために、再び高く遠吠えした。

時をおかずして、白狼族の戦士達が疾風のように大地を駆け抜けていく。

その先の地平には、帝国の都パレスティアを守護する城壁が張り巡らされていた。



巨大な白い塔が、天まで届くように聳え立つてゐる。

真実の塔と呼ばれる大図書館ヴェリタスである。

同盟軍の斥候の代表を務める、新生ジエフルア王国の国王の鬚が赤く風に靡いてゐる。それが多くの獣人族の戦士を勇気づけた。

赤き獅子王バルダス・デュカオーン。獣人族最強の戦士だ。

横に付き従うのは、白狼族の長老の娘エハル。その機知故に、新生ジエフルア王国の参謀に指名された才女である。その横顔がピクンと動いた。大きな白い耳が、遠くから響いてくる何かを聞き取つたのだ。

「どうした？ エハル」

主であるバルダスの言葉に、エハルは答えた。

「バルダス様、どうやらドルメールが帝都から動き始めたようです。ルドアから報告が参りました」

バルダスが頷く。

「白狼族の遠吠えか」

「はい、我が一族にしか聞くことの出来ぬ声。密偵には最適でござります」

赤き獅子王は改めて目の前の白狼族の女を見る。美しいだけではなく才覚に溢れた女だ。

昨晩ガデルを占拠した後、ハルヒコから密偵を出すよう求められた時には、すでに自らの一族をまとめ上げていた。なんとも用意周到である。

バルダスの視線に気がついて、エハルは微笑んだ。
だが、すぐに真剣な眼差しになる。

「それにしても動きが早すぎます。アルマン・エッテハイマン公爵がドルメールを裏切り、帝都の北の二つの街道を封鎖したとしても、帝都への物資が完全に止まるまでには時間がかかります。何故、これほどまで早く帝都を出たのか」

バルダスは静かに言つた。

「アルマンが挑発をしたのだろう。奴は帝国一の軍略家だ。ドルメールを手玉に取ることなど容易かるう」

エハルは頷くと、もう一度白い耳をそばだてる。

「ルドア……。バルダス様、ルドアから再度の報告です。ドルメールの黒帝師団とは別に、気にあることがあると。帝都の地下より不審な地響きのような音が聞こえたため、今から潜入するとのことです」

「帝都の地下だと? どういうことだ」

エハルは首を横に振つた。

「分かりません。ですが嫌な予感がします。全てがアルマン公爵の思惑通りだとしたら、このヴェリタスの中に一体何があるのか……。いずれにしても、まだ暫くは時がございましょう。バルダス

様、ここは私が指揮を致します。塔の中にいる勇者様に早くこのことをお伝えください」「うむ、分かつた。そうするとしよう」

バルダスはそう言うと、赤い風のように白く巨大な塔に向かつて駆けていく。

エハルは腕に巻かれた白い飾り紐に、そつと手を置いた。娘が同盟軍の皆の無事を願つて作つたものだ。見ると、結び目がほどけてている。

「リン、ミュウ待つていてね。ドルメールを倒して七年前の奴らの罪を裁く。この戦いが終われば、きっと獣人族にも平和が訪れるわ」

エハルは微笑みながら飾り紐を結び直した。だが、エハルの手はその途中で止まってしまう。「そんな。もしや、何か悪いことでも……」

リンが編んだそれが、不吉にも途中で千切れてしまったのだ。

風に乗り、空高く舞い上がつていく娘の希望が込められた結晶を、エハルは不安な目で眺めていた。

第二話 守護者

その魔手の前に、滅亡寸前の絶体絶命な状況だつたアルドリア王国。

だが俺——ハルヒコとアルドリアの女騎士達の活躍により、アルースの奇跡と呼ばれる戦で五万

ものの大軍勢を打ち破つた。

その後、勝利の余韻に浸る間もなく、賢王として世に知られたドラグリアの前王、アフアードの

娘アイリーネを旗印に新生ドラグリア王国を建国し、帝国の分断に成功する。

さらに俺達は、アルドリアと新生ドラグリア王国を中心とする同盟軍を結成し、ドルメールを追い詰めるべく帝都を目指した。

これまで入手した情報から考えると、おそらく、ドルメールを陰で操る存在は上級精霊のテネブラエだろう。奴の狙いは、千年前に行われた神と呼ばれる存在になるための儀式の再現に違いない。全てがその男の目論見通りだとすれば、俺が精霊王との賭けに勝つためには、ドルメールの息の根を止めた後、奴も倒すしかない。

その俺達は今、帝国の天才軍師アルマン・エツテハイマン公爵の誘いに乗つて数万年前に滅んだと伝えられる竜族の遺跡、真実の塔、ヴェリタスにいた。

——奴は言つた。

俺がこの世界に呼び出されたのは決して偶然ではない、と。

天空を貫くように聳え立つ巨大な白い塔。その中に作られた聖殿。

額に竜族の紋章が刻まれた女、リューシア・エレハリス。

それが輝く時、俺達はヴェリタスを守る守護者が彼女だと知つたのだった。

しかも俺は、恐るべき力を持つその女が守るこの場所で、予想もしなかつた、あまりにも意外な人物との再会を果たしていた。

(この野郎……。どうしてこいつがここにいやがる)

俺は胸の内で吐き捨てながら、目の前の男の背中を見つめた。

リュオン・マナエル、いや春宮龍音。

こいつは間違ひなく俺の親父だ。幼い頃、おふくろと俺の前から姿を消した男。

竜族の遺跡である、真実の塔ヴェリタス。その守護者リューシア・エレハリスの剣が俺を切り裂

こうとした時、突如としてこいつは現れた。俺達の最大の窮地を救うという形で。

ひらめくマントの奥に見える精悍な顔がニヤリと不敵に笑い、守護者の剣を撥ね返した。

真紅のマントに赤い装束。手には俺の剣エルンディアスによく似た日本刀のような武器を握つてゐる。リューシアは、リュオンに弾かれた剣の反動を利用して体を回転させると、恐るべき速さで男の赤いマントを切り裂いた。

リュオンはそれを見て舌打ちした。その剣先は、リューシアの全ての攻撃を受け流している。

「ちつ、高かつたんだぜ、このマント。俊彦 いや……、この世界ではハルヒコか。後できつちり、お前に弁償してもらうぞ！」

家族を棄て去り、失踪した男が十数年ぶりに再会した息子に発したとは思えない軽い言葉だ。俺は苛立ちを隠そとせぬ。目の前の男の背中を睨みつける。それから地面に転がつたアンフアル王国の秘宝剣エルンディアスを拾い上げた。

ヴエリタスの聖堂の中で、リューシアが再び美しい声で歌い始めた。額に刻まれた龍族の紋章の輝きが増している。それに呼応するかのように聖堂内の内壁に白い光が広がっていく。

守護者はゆっくりと口を開いた。

「……リュオン・マナエル、久しぶりだな。このような場に姿を現すとは、さすがのお前も息子の命は惜しいらしい」

リューシアの言葉に、リュオンと呼ばれた男は苦笑を浮かべる。リューシアと対峙するリュオンの瞳は、俺同様に緋色に輝いていた。

「さて、どうかな。俺の息子なら、あれで終わりのはずがない。そうだろ、俊彦」「その名前で呼ぶな……。あんたに息子呼ばわりされる覚えはない。後でゆっくりと事情を話してもらうぞ」

何故、こいつがここにいるのかは分からぬ。

だが、確かにアルマン公爵は俺の力のことを『そなたの父親に聞け』と言つていた。

そして、俺がこの世界に召喚されたことも決して偶然ではないと。

「いいだろう。ただし、お前が生きていたらな、ハルヒコ！」

リュオンは激しくリューシアと剣を交わしている。俺はそれを見て、驚きよりも憤りの感情が溢れてくるのを抑えられなかつた。

（こいつの前でだけは、だらしない姿を見せるのはごめんだ）

——この男の前でだけは！

「ミルファール！」

俺の中で、上級精霊のミルファールが答える。

（ハルヒコさん、凄い力です！ 何なんですかこの力は！）

瞳が輝きを増す。

俺の中に眠る力をミルファールが引き出してくれているのだろうか。全身が緋色を超える、真紅の光に包まれていく。エルンディアスが、生きているかのように俺の手に吸い付いてくる。さらには、それに反応して、俺の右手の皮膚が赤く染まつていった。

「ハルヒコ！ 一体それは何だ!?」

アルドリア王国の聖騎士団を束ねるルビアの声が聖堂に響き渡つた。

リューシアは俺の体の変化を見てとつて、悠然たる笑みを浮かべる。

「ほう、その力は。面白い！ 来い小僧!!」

俺は両足に力を入れると、一瞬でリューシアとの距離を詰めていった。凄まじい速さだ。さしものリューシアも目が鋭くなる。

今までの動きとは格段に違う。リューシアが放つ無数の剣の軌道が見えた。俺はそれをすり抜けるように前へ進む。

ギイイン!!

俺の体を縦に両断しようとしたリューシアの剣戟を、エルンディアスが弾き返す。

守護者の力に対抗するだけの力が両腕に漲っていた。リューシアはわずかに体勢を崩したもの、そのまま旋回し、俺に向かって剣を真横に一閃する。

俺はエルンディアスでそれを受け止めた。凄まじい衝撃に空気が振動する。俺はその反動を利用して体を捻りながら、リューシアを切り裂こうと肉薄した。

俺の剣先がリューシアの頬に届き、浅い朱の一線を走らせた。真紅の血吹雪が辺りに舞う。その雪が聖堂の白い床に赤い飛沫を描いた。

リューシアが素早く距離を取る。それから頬を指でなぞつて、静かに俺を見た。

「精靈王と、あの男以来か。このわらわの体に傷をつけるとはな。千年ぶりにわらわに血を流させ

た罪は、万死に値するぞ」

凄まじい力が、リューシアの体に集まつていく。

(これは……)

唇からは再び、美しい歌声が紡がれる。聖堂全体がその歌声に共鳴していった。

それを見たリュオン——俺の親父は、あろうことかこの状況において、自らの刀を鞘に収めてしまった。

「俊彦、ここから先はお前達だけでやらねばならん。俺が手助け出来るのはここまでだ」「どういうことだ！」

その時、俺の傍で少女の声がした。

それはパタパタと親父の傍に飛んでいく。

「リュオン、正気なの？ 守護者の力はこんなものじやないわ。いくら貴方の息子でも、一人じや勝てないわよ！」

その声の主を見て、アルドリア宮廷魔道騎士団長でハーフエルフのミルダが叫んだ。

「嘘……。もしかして竜？」

アウロス将軍も思わず声を上げる。

「馬鹿な！」

親父の傍で小さく羽ばたいているのは、紛れもなく太古に絶滅したはずの生き物だつた。大きな瞳で俺達の方を眺めている。

リュオնは、その頭を軽く撫でて答えた。

「テアラ、もし勝てぬなら死ぬだけだ。ここで死ぬようなら、この先に進む資格など最初からない。己の真の力に目覚めるならば今しかないのだ」

「ここから先？ 真の力だと？ あんた何を言つてんんだ!!」

俺が声を荒らげたその時、塔全体から集まつた強烈な光が目の前の女から放たれた。リューシアは白い輝きを手にしていた。それ自体に生命があるよう^にに揺らめき、やがて一振りの剣となつていく。

エルンディアスによく似た刀だつた。だが、その輝きは遙かに強い。リューシアの薔薇色の唇が冷たい笑みを浮かべる。

「触れ得ざるモノ、神を断罪する刃。小僧、お前にこれを手にする資格があるか、わらわに示せ！」

瞬間に俺の目の前に現れたかのよう^にに、リューシアが迫る。

エルンディアスとリューシアの持つ剣が激しくぶつかり合つた。無数の突きが、俺に向かつて放たれる。俺はかろうじてその攻撃をかわした。

しかし、完全には防ぎ切れず、全身に浅い傷口が広がる。今度は俺の血潮^{ちしお}が鮮やかに聖堂の床に

紅の模様^{もよう}を描いていく。

（くそが、まだ速くなるのか!?）

リューシアの目が真紅に輝き、その力が増す。手にした剣が守護者であるこの女と呼応しているかのようだ。

恐ろしいほどの速さの剣が、俺の体に新たな傷跡^{きずあと}を作つていつた。上段から縦一閃に切り伏せようとした女の剣が、紙一重^{かみひとえ}で体をすり抜ける。攻撃を回避^{かいひ}しても連撃^{れんげき}は止まない。リューシアは、すかさず横薙^{よこなな}ぎに剣を振るつた。

エルンディアスでそれを受け止めるが、先ほどの剣とは重さも速さも段違いだ。俺は堪^{たま}らず体勢を崩してたらを踏む。リューシアが逃^{のが}すはずがない。

次の瞬間、鋭い突きが喉笛^{のどぶえ}に迫つた。

「くつ!!」

かわしきれない。自分でもはつきり分かつた。俺の首はリューシアの剣で貫かれるだろう。

（駄目か！）

その時、誰かが俺に覆いかぶさるのが見えた。

俺の体を抱き締めて、苦しげに呻くルビアの美しい顔。その背中には、深々とリューシアの剣が突き刺さっている。

「くう！ ううああああ！！」

美しい女の悲鳴が聖堂に響き渡った。ルビアの美貌が苦悶に歪む。

リューシアの剣はルビアの鎧を易々と切り裂いて、その柔肌をさらに貫いていく。

——まるで時が止まつたかのようだつた。

「いやああああ！！」

ミルダの口から大きな悲鳴が上がつた。

アウロスも微動だに出来ず、ただ呆然と目を瞠つている。

リューシアは、ルビアの体から悠然と剣を引き抜き、冷ややかに俺達を一瞥した。

その剣先からビシャリと真紅の血が床に飛び散つた。

流れ出る血が聖堂の床を染めていき、ルビアの体がビクンと不自然に痙攣する。

「ルビア！！」

「哀れな。男の為にその命まで差し出すとは。……せめてもの情けだ。別れを告げる時間だけでもくれてやろう」

俺の叫び声に、ルビアは静かに息を吐いた。

薔薇の花びらのように美しいその唇から、一筋の血が流れていく。

ルビアは苦しげに笑つた。

「これでお相子だな……。お前に救われた借りを返す前に死なれては困る」

「馬鹿、どうしてこんな真似を！」

俺はルビアの体を抱き締め、慌ててミルファールに救いを求めた。

「ミルファール！！」

「ええ、分つてます。ハルヒコさん！！」

ミルファールが飛び出し、脇目も振らずにルビアの傷口に手を当てた。

淡い光がミルファールの手から放たれる。

「お母様！！」

その横にミルダがすぐさま駆け寄つて、手をかざした。強い力が傷口を癒やす。

だがそれにもかかわらず、ルビアの唇はみるみる青ざめていく。

ミルダが涙を手で拭い、ルビアの手を握り締めた。

「ルビア安心して……。死なせたりしない、貴方を絶対死なせたりしない！！」

魔力の集まつたミルダの手が、ブルブルと震えている。傷口は塞がつていくのに、ルビアの肉体から命の灯が消えていくのを止めることができない。赤い髪のハーフエルフは、両手を血に染め

て叫び声を上げた。

「えうして！ どうしてよ!! 何故治せないの!!」

「ミルダ落ち着きなさい。貴方の魔力が乱れていくだけよ……！」

ミルファールは涙を流しながら娘を優しく宥めた。

リューシアが俺達を見下ろして冷酷に告げる。

「神さえ断罪するこの剣で、あれほど深く切り裂かれたのだ。もはや長くはあるまい。別れを告げねば、虚しく死ぬだけだぞ」

ミルダがルビアの手を握り締めて呻いた。

「嘘よ……。嘘よ……そんなの嘘よ!!」

ミルファールがその頬に顔を寄せて、首を横に振る。

そして静かに言つた。

「もうやめなさい、ミルダ。時間がない。ハルヒコさんとのお別れをさせてあげなさい。ルビアさんは、それを望んでいるはずよ」

「そんな、だつてお母様。ハルヒコ……。ルビアが」

ミルダの頬に、とめどなく涙が流れていた。

俺にはまだ、目の前の状況が信じられなかつた。この世界に来て、初めて愛した女が息を引き取



立ち読みサンプル はここまで

ろうとしている。アルドリアの薔薇にして最強の女騎士。ともすれば、生涯の伴侶となるかも知れなかつた女の命が、俺の腕の中から零れ落ちていく。

俺はミルファールに叫んだ。

「どうしてだ！ 傷口は塞がつたんだろう!? ミルファール！」

「……ハルヒコさん。落ち着いてください！ もうあまり時間がありません」

——本当に、もはや打つ手はないのか？

——俺は背けるミルファールを見て、俺は怒りに任せて手にした剣を床に突き立てた。

「ハルヒコ……」

自分の情けなさに、不甲斐ない己の非力さに、怒りで全身が戦慄いていた。腹の底から湧き上がる震えを必死に抑えようと、俺は剣の柄を強く握り締める。

俺のそんな様子を察したのか、美しい女騎士は閉じていた瞼をゆつくりと開いた。

「ルビア……。お前」

白く震える指先が、俺の頬をなぞつていく。

「騒ぐな……。私はマフルージエ王女に言つた。ハルヒコ、お前は変わらないと。たとえ私が死ん

だとしても、私が生きた証に恥じぬ男のままで私の魂と共に生きるだろう。そう信じている、と美しい瞳が痛みを堪えて揺れている。

俺は、震えるルビアの手をしっかりと握り締めた。

ルビアが静かに微笑む。

「お前は救つてくれた。アルドリアを、リーア様を。お前は、私にとつて誰にも勝る英雄だ」

「分かつた。……もう喋るな、ルビア」

ルビアは俺の胸に顔を埋めた。そしてうわ言のように囁いた。

「……私は誇りに思う。お前を愛せたこと、共に生きることが出来たことを。それが私にとつての何よりの手向けだ」

先ほどまで俺の顔を触っていたルビアの手が、だらりと力なく垂れ下がつた。ルビアの体から力が失われていくのが分かる。

俺の瞳から涙が溢れ、頬を流れ落ちた。

頬れるその体を支えながら、俺は静かに聖堂の床に横たえた。煌くようなブロンドの髪が、白い石造りの床に金色の小さな野原を作る。その姿は何よりも美しく、俺の心中に刻まれていった。

（ルビア……）

俺はその場に立ち尽くしていた。